

せ た か む い

発行 古平町史編纂室
文化会館 842・2590
第182号 平成16・11・1

年表で読む

古平の歴史

《88》

■古平のサバ漁

サバの漁獲高(トンに換算)
大正八年 六二・三二ト
〃一〇年 五九・六三
〃一二年 二三・六三
〃一二年 四九・四五
昭和一五年から三二年までの
漁獲高を比べて見ると左の表
のようである。

(昭和一五～一六年は北海道漁
業生産統計表・同二七年～三二
年は古平町勢要覧)

■サバは人気の魚

サバは家庭での惣菜として
広く利用されていて、先の道新
(9月16日・夕刊)に「店頭に
並んでいる旬の魚で、あなたが
食べたいのはどれ？」という質
問では、サバは5位入賞という
健闘ぶり。1位はサケで、サン
マ、マグロ、ホッケと続いたが、
これは季節ということも関係
した結果でもあるろう。
サバが好きだという女性は一

昭和 漁獲高(ト)

15年	42.56
16年	52.13
17年	63.14
18年	152.35
19年	86.23
20年	11.57
21年	81.00
22年	4.13
23年	50.63
24年	23.93
25年	416.24
26年	175.50
27年	607.07
28年	105.76
29年	39.06
30年	26.25
31年	31.74
32年	64.60
33年	—

—以下省略—

その理由に、「学校給食で食べ
たサバのみそ煮がうまかった」
と言っている。サバは何と言っ
ても刺身が一番という人もい
るが、「鯖の生きぐされ」とも
いわれるようにサバには血合
筋が多く、その中に含まれる消
化酵素が強く働いたため、魚肉の
たんぱく質が早く分解されて
鮮度が落ちやすいのだという。

そして、ヒスタミンに変化す
ると、それが原因でアレルギー
症状を起こしやすくなるので、
生きがよさそうに見えても、当
たることがある。

戦前は、古平でも小サバがた
くさんとれて目刺しにするこ
とが多かったが、食べ切らない
うちにカラ味がつくことがあ
る。それでも多少のカラ味は承
知の上で食べていたが、別にア
レルギーが起きたという話し
も聞かなかつたようだ。食べな
れている土地の人には免疫が
できるのかも知れない。

■サバ料理

それで人びとは生活の知恵
で、塩サバやしめサバなどとい

う独特の料理法を考え出した
のである。

京都の名物「鯖すし」は、し
めサバとすしめしをこんぶと
竹の皮で巻いたもので、大阪で
は「パツテラ」ポルトガル語で
ボートという意味とか。

しかし、これはマサバ(平サ
バ)の方で、ゴマサバ(丸サバ)
は脂肪が少なく味が劣るので、
開き干しかサバ節に製造され
るのが多いようである。

愛媛県宇和島には伝統のサ
バのみそ煮があつて、そのお
ばさんのその秘伝とは……

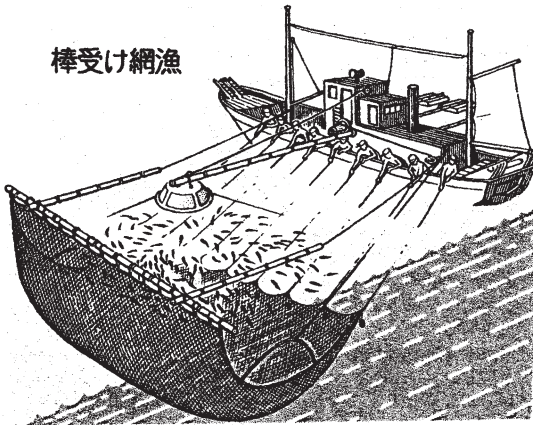
「…みそを溶かして沸いてき
たところへサバを入れ…」
とあつたが、先月のNHKテレ
ビの料理番組『サバのみそ煮』
を見ていたら、

「…いったん湯通してから、煮
えたところへみそを入れ…」
と、いうことは「どうやっても
サバはおいしく食べられます」
と、いうことでしょうか。

■サバの棒受け網

サバとおなじ仲間であるサ
バ科のマグロ・カツオは遠洋の

棒受け網漁



魚であるが、サバはあまり遠洋には行かないので、南の海では餌をつけて釣り、北の海では網でとるのが現在の漁法である。サバ漁に棒受け網というのがあり、これは昭和六年頃、伊豆地方で考案されたという世界でも珍しい漁法だといわれている。

海中にイワシなどの餌をまいてサバを集めるのだが、第二次世界大戦後は急速に広まった集魚灯を利用、敷き網の上に集まったサバを文字通り一網打尽にするという漁法である。

■さらに進んだ巻網漁

昭和二三、四年頃になると、本州方面で成績の良かった巻網漁の漁船がサバの群を追って、船団を組んで古平にも入港するようになった。古平では旋網（せんもう）と呼んでいた。

その頃、新地町・渡辺幸次郎が塩釜から漁船を一隻チャーターして旋網漁を始めた。古平港からは、本州方面の船と合わせて一〇隻余りの漁船が船団を組み、冷凍船一隻を付属して石狩湾へ出漁し、漁獲したサバは古平漁協冷蔵庫で冷凍し、三万貫（二一〇トン）を塩釜へ出荷していた。

例年この時期、本州からの船団が入港すると、とかく飲酒しての暴力沙汰などが起きやすく、学校でも、児童生徒や父母に対して注意をうながすことがあった。

サバの巻網漁で古平漁港も一時は大いに賑わったが、この漁法によるものかどうかは別として、やがて石狩湾でのサバの漁獲高は次第に減少し始め

たが、昭和三〇年代になると激減し、古平でのサバの巻網漁は見られなくなってしまった。

■サバの雑学

日本近海で、サバといわれるのはマサバとコマサバである。

「鯖」という文字が当てられていた青い魚で「青魚」、つまり青い色をした魚ということから名づけられたものである。

古い記録ではニシンも「青魚」と書かれていて、ニシンと混同していたようである。

また、サバは小さな歯がきれいに並んでいるので、「小歯＝サバ」とか、その外にも説があるが、「青い魚」というのが明快で分りやすい。

「サバ」という言葉は仏教語だとは以外である。食事のときに食べ物の一部を取り分けて、鬼神・餓鬼・鳥獣などに施すことをいうのだとある。

神前にお供える魚は初鰯やタイなど、ときによつていろいろあるが、仏前にお供える魚はサバだけである。地方によ

つては七月一日（旧暦）のお盆には刺しサバ（開いて干したサバ）は仏前の供養に欠かせないともいう。鯖大師（サバダイシ）という言葉があるが、これはよくわからない。

日本全国でとれ、旬のサバは美味なので人気もあり、サバの類語は美しい青色から鯖・青魚・青色魚・青花魚など三〇余りもあるという。また、サバという漢字は鯖や鱒など一〇字余りあるが、パソコンにも入っていない字があるので省略。

魚は一般にビタミンDが多く、特に青色の魚は栄養があるといわれているが、サバはビタミンDはもちろんのことB₂も一〇〇gの中に〇・二mgもあり、皮下や背びれの黒っぽいところにはその三倍もあるというが、これは決してサバを読んでもるわけではない。脂肪が一五、一六gもあるが、これは成人病にも良いといわれている。

終りに、古平俳句会会長で、ホトトギス同人でもある越野清治さんの一句でしめします。鯖火燃ゆ沖より空に続きけり

大正一二年

▼五月七日

朝から雨がショボショボ降り出して止まぬ。春雨は静かで気も落ち着き眠れる。毎日の天気続きで乾燥しているの、たまの雨降りは安心する。しかし、大漁したところでは、一刻千金で干し上がるのを急いでいるから、空模様には気をもむことだらう。店にははかりを買う客が四、五人来たが、品切れで閉口した。明日は古英丸で入るだらう。雨降りなので帳簿の整理をする。妻は日増しに壮健になり、何かにつけ姉が来てくれるので助かる。赤児の名前、何とつけたらよい。午後三時から西宮(恵比須神社)で火防鎮火祭があり、三〇余名が参詣し、終わって五時に帰る。今日は朝から雨が降り続く。粕干しのところでは困っているだらう。今日、浜町大火記念日で、町内の宣伝大行列の予定だったが雨で延期する。

▼五月八日

今日もまた雨降り、七時過ぎまで休んでいると心地よい。実際、毎日の風塵にくらべれば、火

の用心だけでも気が休まる。しかし、粕干しには何とも気の毒だ。今日は、妻は産後の巢上りで、台で餅をつき、祝いの膳で産婆さんにお礼をする。店には相変わらずばかりを買う客が来るが、注文したばかりがまだ着かないので困っている。明年からは早目に注文して、品切れにならないようにしなければならぬ。新聞によれば、岩内、古宇は本年の大不漁で、漁業税も収めら

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

れぬ程の悲惨な状況なので、明年まで延期方を願ひ出るとのこと。父と熊さんと出面二人で、エビス倉の片付けをやる。積丹野塚から巻き網買いの客が来たが、これからだんだん流行するらしい。

▼五月九日

七日来の雨も今日はようやく晴れた。鯁漁も、今年は美にあっけないさびしい漁で終わった。第二期は二、三、〇〇〇石より

なかった。例年だと五月に入ってもまだ獲れたが、今年は皆無だった。揚網し、船や網を洗っている。品切れだったばかり、今日ようやく来る。売掛け金もポツポツ入る。生売りや身欠きなど早く入金になるので、五月に入れば金回りもよくなるだらう。

▼五月一〇日

今日は火防宣伝当日で、困支店でいろいろ準備する。私もピラ書きを手伝う。店はポツポツ

掛け売りの入金があり、売れ行きも相当で金回りも良くなってきたようだ。新地で浪花節やら活動写真(映画)、浜町では吉田の後に栗山から来て料理屋を開業。曰の前ではセトモノ屋の大安売りをやっている。町中も一般に景気は良いようだ。午後五時、役場前に集合。私は洋服で出かける。宣伝の小旗を襟にさし、赤たすきを掛けて賑やかに行列する。新地方面からも加わり、生

徒、青年団、軍人分会なども出て盛り上がる。浜町を通る時には暗くなり、ちようちゃんに灯をいれる。仮装にも一四名が参加したが、飛行機をかたどったのが第一等の考案だ。一〇時に散会する。聞けば中一の主人が危篤だという。一〇時半頃、困おじさん等と中へ見舞いに行く。重態のようだ。この日、子供に四郎と命名して届けた。

▼五月十一日

天気快晴、店は建網の切り上げで綿糸類が出る。四貫のはかりが売れる。妻も日増しに壮健になり、もう心配もなくなったようだ。熊さんは農園の枝切り、種まきなどをやる。鯁場、鯁場と言っているうちに蒔きつけの時期になった。昨日の火防宣伝の後始末に行く。仮装の一等から一〇等までを発表するピラを書き、賞金の金を包む。一〇時頃、小樽田から、一の葬式に供花をした。いから注文してくれと電話があり、花屋に注文する。午後から帳簿調べをする。合計一六、〇〇〇余円ある。昨年より五、〇〇〇円程も不足、一昨年同額くらいの貸し方、本年は漁が悪いが、

八割くらいは入金する予定だ。

▼五月二一日

起床七時中主人、昨夜一時頃死亡されたとのこと。ずい分と長い病氣であつたが、遂に亡くなられたか。父は早速弔いに行く。私は店の帳簿調べをする。小雨がシヨボシヨボと朝から降っている。一〇時から、沖村「米田の葬式を送りに行く。暑からず寒からずで一番よい時期だ。沢江を歩いていけると、どこも漁の片付けで一生懸命だ。歩方は解散し、建網もボツボツ暇になる。二つ目の穴(トンネル)辺りに、この度の時化で流された刺網がかたまりになって岸に寄っている。この網だけでも大した量だ。一時、沖村田畑に着く。姉や支店のおつかさん、小林さん等が来ていた。昼食を馳走になり、「へ行く。雨が降り出したので出棺が遅れ一時頃になる。二時過ぎ、小林さん等と帰る。往復歩いて運動にもなった。沖村街道の山中では桜が咲いている。この日は四〇〇円余りの入金があった。

▼五月二三日

起床七時、朝のうちは快晴で

あつたが、九時頃から曇り、時々小雨が降る。店はボツボツ勘定が入金する。熊さんは農園の枝切りをやる。困支店では葉かけをやっている。今が一番良い時期なのだが手不足でやれぬ。父は土の通夜に行く。夕方、久し振りに海へ出て見たが寂しくなつた。港内には帆船が二隻停泊している。浜では小屋ほこしや船の片付け、納屋ほこしなども終わつて、周りは急に広々としてきた。来年までまた静かになるのだ。二、三日後に行くつもりだ。

▼五月一四日

鰾場の切り上げ時期になり、漁も追々寂しくなる。土の葬式があり、九時に私が送りに行く。白衣を着て棺側に付き添い送る。父も見送りに行く。珍しく天気が良かった。一二時に帰る。店は切り上げ用品が売れる。入金もこのところ毎日ある。昨日から、学校で壮丁検査(男子が二〇歳になった時に行われる徴兵検査)が行われ、学校は三日間休みになる。午後四時頃、焼き場へ骨拾いに行く。四方の山は若葉が萌え出て、ヒバリの鳴き声も聞

こえのどかな景色である。サクランボも盛りだ。六時に父といつしよに帰る。

▼五月一五日

晴天、天気も一年中で一番良い季節だ。大阪のおじさんが出る。発されるので浜まで見送る。上ナギだ。沖には内地行きの汽船二隻が荷積みをしている。鰾製品が送り出され、内地からの金が入って来る、それが町中に散るのだ。我々のところへも貸し方からの入金となる。何として

も鰾場の金が第一番だ。二時頃、久し振りで農園へ行つて見る。種金では百余名の出面が出て粕干しだ。この暑さと、先の雨で粕玉にはウジのわいているのもある。なかなか気のもめることだろう。熊さんは枝切りで忙しい。今年は思いっきり枝切りをやつたので、虫取りや袋掛けも楽になることだろう。五時頃帰る。粕干しは歌を歌いながら賑やかにやっている。

▼五月二〇日

起床七時、一六日以来昨日まで旅行で疲れた。朝の内は、留守中の帳簿や書類などを整理する。正午、自転車で新地方面へ行

き、「三へ寄りいろいろと話をする。そのうち急に雨になり、自転車にかさをさして戻り、田に寄る。このところ浪花節やら芝居など港町から新地方面は景氣が良い。入船町にも行き、寺田に寄る。しばらく話をしたが、大漁したので網もドッサリ買い入れるとのことだ。介に寄り大謀の漁模様などを聞く。アバ縄の注文を受ける。本年は大いに活動し売り込むつもりだ。㊦でも話をし八時に帰る。

▼五月二一日

起床七時、貸し方の請求に歩いたが、刺網の不漁のところでは漁夫の賃金分が損になった。証書にしてもらいたいと言う。どうも仕方ない。雨で熊さんは店番だ。帳簿整理のあと新地方面へ行く。「三に寄り、しばらく話をしてから銀行へ行き、手形七通、七〇〇円余りを払い込む。介や会田によつたが、大漁で高値だったので景氣が良い。身欠き四〇本あつたが、一本二五円で売れたとか、数の子一本一三円で買うという人が来たと、実にエライ勢いだ。刺網も七〇〇間から一〇〇〇間は欲しい

という。入船町から群来村、美国方面へ力を入れたら、かなり売れ行きもよいだろう。三時頃から時化になる。松田に寄り、前浜の漁況などを聞き四時に帰る。

▼五月一二日

天気快晴だ。店は掛け金が毎日のように入る。朝早く、湯内の山科の夏大謀用として、ロープ二丸、アバ縄二〇〇間、実子縄、アマ網など四〇〇円分程取りに来る。ずい分忙しかった。今日は旧四月八日、餅やらおはぎなどの馳走がある。私は、一〇時頃自転車で美国行き。新地の安藤へ自転車を買って陸行する。天気は良し、新緑の郊外は実に景色も良く、気も晴れ晴れする。熊木の浜で下り、井沼に寄ってしばらく話をする。大漁だったとのこと。景色のよい、網入用とのこと。景色のよい岬の砂浜を望むと、ちょうど鎌倉の江ノ島の景色だ。海水浴にもよいところだ。⑤に寄り五〇〇円受け取る。⑥に寄ると、今年イワシ流し網をしたので、網を紹介してくれと依頼される。福井、本田、企などに寄り、六時半に出発し、アットマイの高橋に寄り、ち

ようちんを借りて帰る。安藤から自転車、九時家に着く。ずい分よい運動になった。本日、全部で一、四〇〇円程の入金があった。美国方面は行商やら、料飲店の景気がよい。

▼五月一四日

今日も珍しく快晴、野山は若葉が茂り一番よい気候だ。今日は四〇〇余円入金する。この頃は掛け金かなり入金する。午前中、帳簿を整理する。午後一時銀行へ行き、東洋網へ三六〇円送金する。入船町方面を廻り四時帰る。港内には魚粕、身欠きなどの積み取り船三隻が入港。二〇隻余りのはしけが荷役している。古平から出る一日の海産物も大したもの。代金が町内に廻るので景気もよく、行商の入り込みもずい分多い。四時頃、久し振りに農園へ行く。旭などばかりよい蕾だ。来月五、六日頃には満開になるだろう。サクランボは花盛りだ。枝切りをやったので、農園も晴れ晴れとしている。六時頃帰る。種金の粕干し、六〇〇七〇人で賑やかだ。三、四日中には切り上げることだ。東洋から一万五千間手

持ちのもの、七一に見切るとの通知が来た。七〇なら買うつもりだ。

▼五月一五日

起床七時、店は月末も近づき、鯨製品も意外と高く、金回りも良いので入金もポツポツある。熊さんは農園行き。午後から雨に加えて風も強くなってきた。九時頃銀行へ行き⑥へ一、〇〇〇円を振り込む。帰りも時々風が強く、木工場の辺りから自転車を押して帰る。夜、火防組合の協議があり組合長宅に集まる。新調の帽子が配当になり、組合費の徴収や火防上の注意事項など協議する。九時過ぎに散会する。⑦からこの日「ナワツミニチュウウンチン五〇セン」と来た。一個五〇銭とは実に安い。小樽へ古平間でも六〇銭ぐらいだ。昨日、東洋から七円五〇銭に見切るとの書面が来たが、七円なら買うと返電する。

▼五月一六日

起床七時、今日は学校の遠足だというので、子供達は六時頃起きて、にぎりめしとお菓子など騒いでいる。悦三までもにぎりめしとキャラメルを入れ

た袋を背負って喜んでいる。九時頃、先生に連れられて町を歩いて行った。午後三時頃には皆帰って来た。聞けば幸治は湯内、文治は廻り淵、吉治は泥の木学校、トミはすりばち山まで行って来たとのこと。皆面白かったと喜んでい。店も入金があり、ポツポツ忙しい。朝、中村床屋で散髪をする。小樽から田、又、下山口の店員が集金に来る。とにかく相当の漁があり、製品も暴騰している。勘定の出来ないところは無かったとのこと。古平は幸い大漁だったが、岩内、古平方面は惨憺たるものだったという。⑧から、平安丸に縄と竹を積んだと電信が来たので、先ずは安心した。東洋へ七円と打電したら「ヒケヌ七一五ニテツムイサイフミ」と電信が来た。原系が暴騰しているというから、七円五〇銭も仕方ないかとも思っている。

▼五月一七日

起床七時、熊さんらは農園行き。先日、青森の大岡へ照会したいわし網の値段、電信で返事が来た。連絡したら、その値段で三〇〇間注文してくれとのことな

ので、早速、電信で注文する。早く来て、来年の試験漁に相当の成績を残してほしい。さすれば、今後の漁業や我々の商売にもよい影響があるだろう。九時過ぎ自転車で沢江、沖村方面へ行く。途中、△仲谷さんへ寄り、大謀網の買い入れのこと依頼したが、主人が居なかつたので話だけして沖村へ向かう。道路を気持ちよく走り、一〇分程で着く。

《高野名幸作日記》の二

ただ今、皆さん方から大変好評をいただいて連載しております『高野名幸作日記』は、平成九年にご遺族から数冊のご寄贈を受けました。その後、日記が相次いで見つかり、明治三十三年から昭和三八年まで、実に六三年間にわたつての貴重な資料となりました。欠けている年もあります。総数四八冊外に長女トミさん（小学校高等科一年）と長男幸治さん（小学校六年）の二冊があります。

『せたかむい』で毎号ご紹介しておりますが、ページ数も増やしたいと考えております。

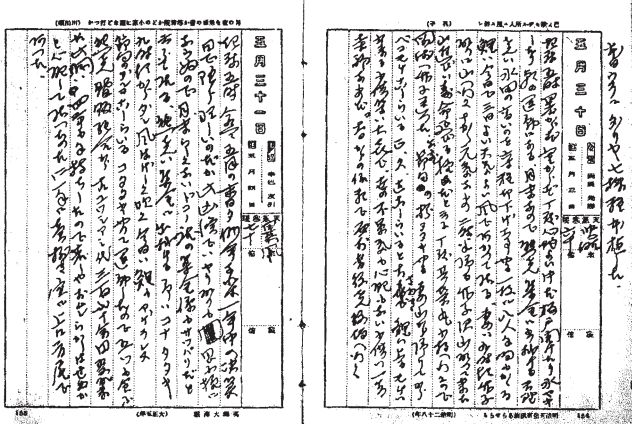
五、六軒廻つたが、町中で太鼓やおはやしで五人が踊っている。どこから来た芸人なのかなかなか上手で、鯉場気分のような。帰り沢江の(中)に寄つたが、小網のホッケ、マスが大漁であつた。三時頃帰り、食事をしてから新地方へ集金に行く。種田本家へ行つたら今年畑を借りた礼を言われ、畑を売つてもらえぬかと相談を受けたが、考えさせて

せてもらふと帰る。漁網類も勉強してもらえれば買いたいとのこと。明年より相当奮発せねばならぬ。六時頃から雨になり、急いで帰る。夜、帳簿類の整理をし、久し振りに本に行く。いろいろ話をして一時近くに帰る。

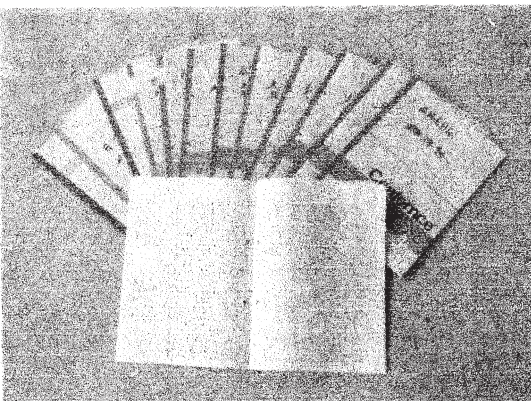
▼五月二八日

起床七時。昨日来の雨は今日も曇り空で、小雨が降る。掛け金も刈の六〇〇円余りを筆頭に

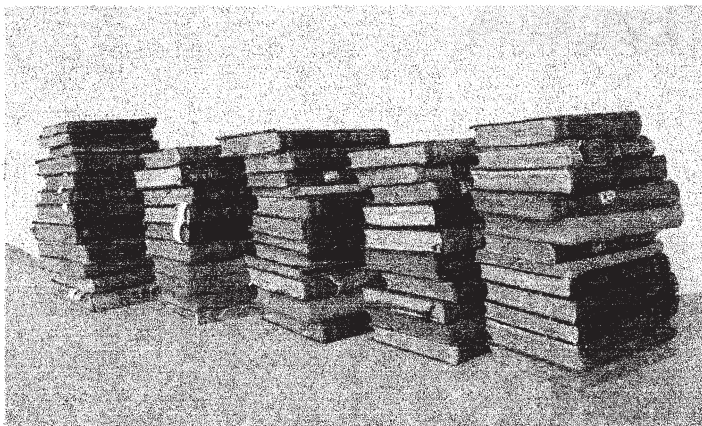
合計一、三〇〇円程の入金がある。月末までの入金はあるがたい。タラ釣り連は六月でなければ入金が無いし、それに不安の方も大きい。明年からは考えねばならぬ。熊さんは新地から浜中方面の書き出し配りをする。沖村、沢江方面はコウナゴ、ホッケが大漁とのこと。夜、父は宝海寺ご母堂の通夜に行く。この日は寒い日であつた。



⇒ 日記（二二分）全文



⇒ ノートと日記帳五〇冊 ↓



日記は写真でご覧のとおり分量です。折々にノートに写し取つてから印字しています。

ダンメン・マーズ

大 澤 文 子

連日の猛暑にも耐え、猛り狂う十八号台風にも耐え続けた日々なの……。

はや初冬を告げる小さな使節雪虫が頬をかすめる。一気に冬到来かと嘆かずにはいられない。晩秋のぬくもりをもう少し身体のみずみまで浴びていたかったのに。止み間なく散りくるもみじ葉は小庭の芝生を埋めつくす。数々の花鉢も急遽、部屋うちに同居させるべく始末しなければ……。

だがシヤコサボテンだけは「クリスマスの花だからネ、涼しい個所に置かないと咲きすぎるよ」と、注意された。

クリスマス——クリスマスにはまだ早い……が、あーあの時、氷雨降る夕べだった。思いがけなく舞踏会への招待を受けた。一瞬、私は躊躇した。

パーティー用のドレス一着、シューズ一足、おまけに踊れない。

若い彼女達の誘いは強引なもの。負けた！

車窓を打つ氷雨の音に私の心臓は異様な高鳴りを感じた。

——まあ知らぬ社会の一面に触れることもいいのでは……

——いやダメ、やめればよかった！ どうしよう、

若い彼女達の話しかけにもうわのそら、

やがて舞踏会とはうらはらに鄙びた小料理屋のノレンをくぐった。食事をするという。

小さなグラスで乾杯……。なんの乾杯なのかな？ 心の中で苦笑した。踊れない私をひっぱりだしたからなのか。

まだうす明るい街の中を歩くこと数分、氷雨に濡れるブルーのスカートが気にかかる。

押される様にうす暗いせまい間口を通り、押されるままにせまい階段をのぼる。どこからともなく流れるメロディーが足もとをくすぐる。きらびやかな

シャンデリアも照明も、ややあかりを低くおさえられたホールにはまだ人影もまばら。

予約していたのであろうか、ホールの中程の席に案内された。

怖ず怖ずと彼女達についてゆく私になにかしら惨めに感じた。

自分の世界とは違う！ 違うと心の中で叫んでみたがもうおそい。

またたく間にホールの席は所せましと満杯となる。だが次ぎつぎに流れるメロディーに席はあきつばなし。

ふと背にサインを受け、ためらいながら立ちあがる。かるやかな三拍子の円舞曲、うまいリードにシューズは軽快な動きをしめす。ホールはさながら熱帯魚のごと。何時しか曲もかわり四分の二拍子のアルゼンチンタンゴ。きびきびと小気味よさをもした。座席に背をもたせ、うつとりとリズムをとる。その瞬間！ ふっとおさげ髪だった少女の頃が思いだされた。

あの頃、音楽名映画『会議は踊る』『メリーウィドウ』の映画は、あらゆる音楽ファンを魅了し止むことを知らなかったという。

また『会議は踊る』の主題歌

を口ずさむ時、会議室の椅子でさえ軽快に踊りだしたという。

わたしの父は物理学専攻の教師なのに何故か音楽が大好き。SP盤の外国の音楽レコードを何枚も求め、夕食後にはいつも部屋にこもり、ききほれていた父の姿を今でも覚えてい

い。つか外国映画の『会議は踊る』を、父に連れて行ってもらったことがあ

るが、三たびも観賞したその頃がなつかしい。

父の留守の時、私は父の部屋にこもりあの有名な「悲歌（エレジー）」のレコードをかけ、ひとり涙したこともあった。

今思うと、なんてセンチな少女だった……。とおかしくもあり、また、やっぱりなアと納得する面もあるのは何故……か。

「帰るわよ！」

突然、若い彼女達の声にフツとわれにかえり、背を押されるままにせまい階段をおりた。

イルミネーションのかげやく夜の街は美しい、上気した頬に氷雨はこころよかった、

あーあの時から、憑かれたようにソシアルダンス教室に通った年月、さっぱり上達もしないが、買い替えたダンスシューズは？ ……何足か。

教科書のいまむかし

◇寺子屋の開設

寺子屋を経営し、師匠となるのは庶民や浪人というのが多かったようです。当時の本に、

「昔、手習いの師匠というのは数える程だったが、今は一町内に二、三人ずつもいる。広い江戸の町であるので、どうやら生活も成り立ちそうである。……」

江戸のようなどころではそれで生活もできたようでしたが、農漁村では、僧侶、神官、庄屋といった人達しか寺子屋を開く人はいなかったようです。これは経済的に苦しい人たちが多く、月謝も払えなかったもので、生活にいくらでも余裕のある人が慈善的に寺子屋を開いたからでしょう。

寺子屋の絵を見ると師匠は男が多いようですが、江戸・大阪では女師匠も多く、特に江戸では三人に一人は女師匠であ

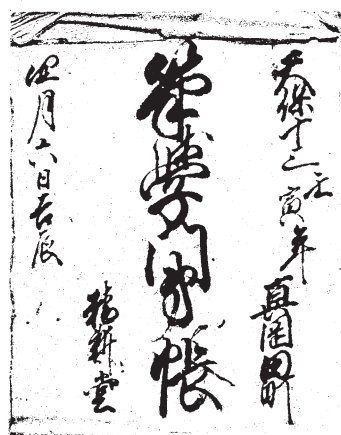
ったといいますが、これは女子の寺子が増えたことにもよるようです。

◇寺子

入門する年齢はまちまちでしたが、多くは六、七歳で、二、三年間というのが普通でした。時間は午前八時頃から午後三時頃までで、夏期、冬期、農繁期、農閑期とそれぞれ時間もずらしていました。

寺子屋には学問の神様とし

「筆学問弟帳(天保十三年)」



ての天神様(菅原道真)をまつつていて、二月二十五日の「天神講」は共通した儀式でした。祭壇を設けて天神様の画像を掲げ、神酒、菓子、餅などをお供えして手習いの上達を願い、終わると師弟揃って会食をしました。その時、師匠は天神様のことについて話をするのが例でした。

◇師匠への謝礼

寺子として入門する時に納める金品のことを束脩(そくしゅう)といいます。これは中国の故事から名づけられたものです。師弟という関係を結ぶしきたりとして、普通、白扇一本と共に銭百文か銀一朱、或いは酒、米、赤飯、野菜、菓子などを贈ります。菓子は先輩の寺子たちに、仲間入りのあいさつ代わりとして振舞います。

元来、教育という行為と金銭とは結びつかないものでした。むしろ感謝の心をもつてその恩に報いようというものでした。だから、金額の多少や納入の時期などの定めはありませんでした。親の気持ちによつてすべ

→寺子屋の手習い風景



てが決められていたのです。寺子屋はごく小人数から、二〇〇人を超えるマンモス寺子屋まであったそうですが、寺子屋は人数がいてもいわば個人指導ですから、師匠の前では真剣に勉強していても、離れると騒ぐ子、いたずらする子というのは、昔も今も変わりません。教え方もなかなか厳しかったようで、行儀が悪かったのか机の上に座らせられたり、打つ

ときは扇子に厚紙を巻いて、音だけは大きいが大して痛くないようにしたそうです。

厳しい師匠、優しい師匠といったのは当然でしょうが、厳しい師匠に人気があつたといえます。本当に学びたいと思う者はより厳しい教育の方を選んだのでしよう。学ぶことの本質を考えるとそういうことになります。

◇教育の内容

実用的な知識を身につけるということ、読むこと・書くこと・そろばんがその主な内容でしたから『手習所』ともいわれていました。図画を教えるところもあつて、師匠の描いたものを模写したり、身近にあるものを墨で写生したものが残されています。

ある老人が、「長い浮世のさまざまな経験をしたことは忘れ果てたが、八〇年以前に寺子屋で習った名頭だけは忘れようにも忘れられない」と語つたそうですが、師匠の読み聞かせる物語にも、寺子への

大変強い印象を与えるものがあつたことがうかがわれます。

(※名頭「名頭字尽」(ながしらじづくし)のことで、有名な姓の頭の字、源・平・藤・橘・菅などを列記して、読み書きの教材に広く利用されていました)

←女子用往来物『衣服往来』



またこの頃、親が子供の寺子屋で習うものを望んで、

名頭と江戸方角と村の名と 商売往来これでたくさん

という歌がありました。当時の一般庶民の教育への思いが示されています。

また、実用的な往来物の中での異色は、女子用の教科書ともいえる『衣服往来』です。

「衣服は花美(かび)はでを好まず、よろしく寒暖に節するを要とすといへども、装束服色の装によりて貴賤尊卑老若男女の着るを別つ、礼の本たれば身の分限にしたがひて……」から始まって、最後は、

「女の嗜みは筆学遊芸種々多しといへども、裁縫紡績の業は第一にして勉て怠るべからず」とあり、このような考え方が、明治以後の女子の教育にも影響していることがわかります。

武士の通う藩学校では、なぜか算術を軽べつていました。が、これに対して町人は、算術は常に心がけるべきものとしていました。

当時のある有名な本の中に、

「公家は敷島の道、武士は弓馬町人は算用こまかに針口の違わぬように当座帳付べし」とあります。この算用というの

はそろばんのことです。

(※公家は敷島の道「朝廷に仕える人は詩歌に励め」)

この頃には、中国の本を参考にして『塵劫記』(じんこうき)という、計量法・そろばんを使つてのいろいろな計算法などを分りやすく書いた、日本で初めての算術書が出版されています。

『塵劫記』という名前のついた似たような本も多く出版され、開平(中学三年で学習する平方根)などが、用具を使つて分り易く説明しています。

←『塵劫記』の類書



中 弾 戦 中 泣き笑いの 樺太漁場体験記 戦 後 弾

吉 野 慶 一 郎

盛会のうち 今日講演に
に終了する 大満足した観
客たちは、異口同音に感謝と慰
労の言葉を帰りに残して行きま
した。

「今、自分たちはソ連軍の占領
下に置かれていることも、日頃
の苦しみも辛さも忘れる程、今
日という日は楽しかった」

口々に声を揃えて喜んでもらい
ました。一方、ソ連兵たちか
らも、「ハラショーヤボンスキ
ー！」（すばらしい日本人！）
と、声をかけられました。

こうして考えてみると、歌や
音楽には全く国境というものは
なく、たとえ民族は異なってい
ても、人と人は仲良くつき合え
ることができると、なぜ国と
国となると戦争をするのか？
そんな思いが頭を横切る。

隊長の好意 公演が終わっ
てを受けて て、すぐに駆け
つけて来てくれたのはあの将校
でした。少し前に、通訳から将
校の身分を聞いて分かったので
すが、進駐軍野田方面警備隊長
で、頭文字がMという陸軍大尉
であるとのことでした。

M隊長は笑顔で皆に握手をし
てから、

「今日の音楽会はとても立派で
した。ソ連の国歌を始め、歌や
曲も沢山取り入れてくれて兵士
たちも大喜びです。ありがと
う、ありがとう。あなたたちは
プロ級です。もし望むなら、ソ
連軍が応援しますからプロ楽団
を結成したらどうですか。よー
く考えておいてください」
そして、

「今、何か必要なものはありま

せんか。あるなら言ってくださ
い。これは今日のお礼です。皆
さんで乾杯してください。」
と、しばらくは拝んだこともな
い高級ウイスキーを贈ってくれ
ました。

プロ楽団結成の誘いには、一
同ただアゼンとするばかりでし
たが、もちろんそんな気は誰も
持っていないので、

「隊長のご親切なご配慮によっ
て、今日の音楽会が盛会のうち
に終了出来たことを厚くお礼申
し上げます。また、楽団へのご
厚意についても深く感謝いたし
ます。私たちは、早速、明日か
ら家業やそれぞれの職場に専念
するつもりですので、この白樺
楽団は、今回の公演をもって解
散することになります。今日ま
での隊長のご好意は決して忘れ
ることはないでしょう。」
と、お礼と共に返事をした。

それと、さらにM大尉から、
「——何か必要なものがあつた
ら言ってください」

という言葉があつたので、折角
のこの機会を逃しては……とば
かりに、前々から実は渴望して

いたあることを思いだし、その
ことを思い切つて切り出してみ
ました。

映画観覧を 「私たちは、い
要望する ま特に欲しいも
のはありませんが、別なことでは
ありませんが、日本人は映画が
大好きなのですが、今は全く見
ることができないので、とても
寂しい思いをしています。何
とか映画を観覧することができ
るように、寛大なお取り計らい
を心からお願ひ申し上げます。
今のところ、これ一つだけが私
たちの心からのお願ひです」
と、断られることを覚悟の上で
要請しました。すると、M隊長
はやや考えていましたが、

「皆さんからの話はよく分かり
ました。映画はいいものですよ
ネ。ほかならぬ貴方たちからの
頼みですから、自分も何とか
考えてみます。少し待ってくだ
さい」
とのことでした。

「スコシスコシ マツテクダサ
イ」と日本語で、しかも笑顔で
言っていたことが何かしら期待
感を抱かせました。（続く）

札幌通信 第23信

堀巖君という恋人

吉 川 義 雄

大正生まれともなれば、生きている友は少ないし、生きていける者も交友はほとんど無い。

ふるさと古平の海と山と風と光の中での想い出だけが、年を経るごとに鮮明になってくるのは何故だろう。

青春真つただ中の頃、映画を見て知った主役の言葉が忘れられない。「人は青春の想い出に生きるものである」

高等科二年までしかない小学校を卒業すると、イヤでも仲間はずれになる。新しい運命の展開ばかりが気懸かりの時期だから、友人との別れがそれ程重要ではなく、いままで通り明日また逢えるようにアッサリ別れた。

新しい場所での、新しい生活にくたびれかけた頃、たまさか帰る古平になつかしい友が居てくれると真つ直ぐにとんで行った。

そんな友の中に堀巖君がいた。どうして彼と兄弟のように仲が良くなったのやら、順を追っても思いつかない。

家も離れていたから幼年期からの友でもないし。新地分教場の頃も知らない。たぶん五年生頃から互いに惹かれたものがあったのだろう。

あの頃は生徒数も多く、一教室に六十人は詰め込まれていたから、一学年はい・ろ・はと、三学級に別れて教わった。分教場時代から男女が一教室だったから、引き続き共学のは組になっても、私には何の変哲も感じなかったが、仲良しになった幾人かの友の内、堀君がい組になったのが残念だった。

六年生になった時と思うが、一度だけ同じ教室になったときは口笛を吹いて二人で喜んだものだ。

彼には兄弟はいない。親同士

が漁師仲間だから、チラツと貰いっ子ということばも聞かぬではないが、私にはどうでもいいことであり、彼の落ち着いた言動が、私のように妹や弟達からいつも苛立たされている者にとつては、意外な安息を保たれていたのか知れない。

お金なんか正月意外は持ったことがない私にとつて、彼のポケットマネーは、随分私の小学生生活を潤してくれた。

高等科の週番を終えると、時間も経っているしハラも空く。チヨベタン川の橋の袂にオヤキ屋があり、苦痛になる程の匂いを風にのせる。並んで歩いていたら彼が、私の横腹をひそかに突くと脱兎のように店に走った。

本陣の浜に揚げられた小舟の陰で、静かな海を眺めながら二個ずつのオヤキを食べた想い出は、生涯忘れることはないだろう。

私は札幌に出て、彼は古平の漁業会で給仕さんになった。青春時代の微風、二人共異性に気をとられぬ訳はないが、せつせと文通だけは続いた。私の帰郷はめつたになく、彼と再開した

強烈な思い出はない。
切れ切れになつてゐる記憶をつなぎ合わせるのは随分苦勞が要る。

兵隊検査で帰郷した時、彼と逢つた記憶がないのは何故なのか。余市での検査を終え古平に帰つてみると、行く前から危険であつた祖母が亡くなつていた。そんな大きな悲劇の最中だったから、私にとつて恋人のような彼と逢うヒマがなかったのかも知れない。

それどころか、いつの間にか彼が亡くなつたとの悲報が届いた。

彼は戦争とは縁がなかったはずだから、青春真つ盛りのさなかの病死ということになる。

戦場に行く直前だったような気がするが、イゲタサン裏に住む彼の両親を訪ねた。

息子が帰つて来たように喜ぶ彼の両親とお会いしたが、私の方居たたまれない程彼のことを想い出させてしまつて、早々に退散したことを覚えてゐる。

あれから六十数年の年月を経ても、青春の想い出は色鮮やかに蘇ってくるものだ。

連隊の冬季演習

それから間もなく連隊長が交代し、吉村連隊長に代わって小林与喜三連隊長が着任した。

そして連隊を挙げての冬季演習が行われることになったが、これは、この後に行われる師団の冬季演習のリハーサルなのである。この時も連隊本部から、私にラッパ手としての指名があつた。

本部に申告に行ったら中川教官に会い、

「橘、連隊長の側にピッタリとついていてもらいたい。頼むぞ」と、言われ激励された。

おそらく雪道で、スキーを着けた連隊長がもし転倒でもすることがあつては、との配慮でもあつたのだろうか。

とにかく私は、連隊長のいるところピッタリと後ろについて歩いた。

最初に出た命令は【演習始め】で、私の吹くラッパ一つで

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

23

橘 義 春

三千人からの兵隊が行動を起したり、止めたりすることになる。これは満更悪い気持ちではない。皆は雪の中に陣地を造ったり、雪の中を走り回って戦闘訓練をしているが、私にはそれが

がないのだ。

この演習は朝から翌日の朝まで二四時間の演習である。

気屯の町外れで松の苗圃を経営している人の離れを借りて連隊本部とし、薪ストーブの

ある土間が連隊長室であつた。ここでは連隊長と私の二人つきりなので、ストーブの薪を燃やすのが私の仕事のようなもの

であつた。外は、連隊長が視察に出かけるときに軍刀を背中に背負わせたり、スキーの着脱の面倒をみるぐらいであつた。

夜の十二時頃、連隊長の視察のお供をして出かけたが、ぼたん雪が降り寒い晩だった。ある中隊が全員偽装のための白衣を着て、雪の中をはいながら前進していた。前方の敵軍に奇襲攻撃をかける作戦のようだった。こんな状況を視察してから、苗圃の本部に帰った。

そして、夜が明けると【演習終わり】のラッパで演習は終了する。

私としては随分と楽な演習をさせてもらったが、すべてはラッパに感謝しなくては……。

師団長が気屯の連隊へ

師団長峰木中将が、国境視察の帰りにわが連隊を訪問することになった。師団長が連隊を訪問するなどということはそうないことで、連隊を挙げて、一〇日も前から内外の清掃などに精を出した。

師団長が連隊を訪問するとい

う特別な日なので、当日の兵も連隊から選抜されることになり、各中隊からは、現役バリで優秀な粒選りの兵隊を二名ずつ選抜することになった。ラッパ手も連隊で最優秀の現役兵が選ばれることになる。

いよいよ師団長訪問の日程が決まり、夜の点呼のときに、週番士官の坂東准尉から選抜衛兵の発表があつた。

「中隊からの選抜衛兵は、渋谷平八郎上等兵」

渋谷上等兵は私の隣に寝ている戦友で、誰が見ても優秀な四年兵であり選ばれて当然だった。彼に拍手してやりたいと思つた。

「次、ラッパ手は橘」

と言われた時は、一瞬、信じられない気分だった。

でも、今は連隊一のラッパ手として認められたのである。連隊本部が現役兵からではなく、補充兵であるこの俺を、選抜衛兵のラッパ手として指名してくれたのである。名誉であると同時に、大きな責任を負つたことにもなる。

(続く)

連作

古平まで

坂 本 甚 衛

地底からの声 2

八月十八日、俗名工藤政三氏の墓参を終え、周囲を一巡してみた。圧倒するような墓石の大群である。禅源寺裏から広い山肌を這い上り、左側崖の樹木から右方の林までいっばいに開けた石塔は、白々と晩夏の太陽を跳ね返し、光沢のある花崗岩群が重厚を極めて整然と連なっている。さぞかし、どこの家でも金のかかったことだろうなど、他人事ながら気を病んだ。

今はどうか知らぬが、一昔前の古平は確かに鰯の豊漁に沸き立ったろうし、それが北へ去ってからは助宗鱈漁に転じ殷賑（いんぎん）を極めたのもまた事実だろう。同じ頃、稲倉石鉾山の

存在が町の発展に大なり、小なりの影響を与え、潤したともいえる。

そうした往時の繁栄は、現在累々と続く墓石の立派さでも偲ぶことができるというわけだ。

私が当町に越して来た昨々年の春以降、まだ少しは足が丈夫で健全だった頃の朝、ウォーキングで墓地への道程を辿るとすれば、専ら高校への坂を登り、グラウンド横から墓地上方に出て、古い墓所内の中央部に近い妻の実家の墓に軽く会釈し帰るぐらいで、比較的新墓ばかりが並ぶこちらの一带に来る機会は無かった。従ってこちらの敷地に足を踏み入れるのは今回が初めてである。

新しい墓は時の移ろいを感じ

させて年毎に豪奢になって行くようである。少し良いなと思える墓は、墓石の傍らに「墓誌」と名付けた物故者の戒名、没年月日、年齢などを記載した長方形の小型の石碑があつて目を奪う。

前号で紹介した工藤家のそれのように、裏面に短歌とまではいかずとも、箴言（しんごん）やめいた語句や、思いの籠もった一言が刻んであつたりする。死者の、というより、残された生者が贈る鎮魂のメッセージとでもいうべきか。

客観的にみれば、自分の身内を葬った墓でない他家のそれは、いかに数多かろうと唯網膜を通り過ぎるだけで、強いて懐旧や哀悼の念を誘う存在ではない。

しかし、物言わぬこの石塔の下に眠る幾多の霊にも、昔はそれぞれ違った人生があり、違った修羅があつたと思うと何かなし胸を衝かれる。

同じ生涯は一つとしてない。

一旦埋葬されてしまえば、同形の墓石という仮面を纏い一律に一律だが、彼らの生前にどんな人間模様があり、煩惱があり、ダイナミックな生き方が展開していたか。燃えつきた一生を送った人が果たしてどれだけいたか。時間の経つのも忘れるような何か一つのことを情熱を傾け生きた、そんな人が何人いたのか。或はドロドロした物欲が露骨に見え隠れして、世の顰蹙（しんそう）を買った男女がいたかも知れぬ。または異性にうつづを抜かし、愛欲に四苦八苦した少しばかり鼻下長の人物がいたとしても不思議ではない。

盂蘭盆とあつて、ちらほら人の姿が散見する墓地の一隅に佇み、私は心気を澄ました。居並ぶ秘つそりした墓石群の物言わぬ安寧の底から、ふと放つ気のようなものを感じた。いうなれば、死者が呼びかける声とでもいうのだろうか。一種の霊気に似た気配すらする。

こんな頭上には汗ばむ程の

編集雑記

▽恒例の文化祭作品展示会も終わりましたが、今年も写真の展示をしました。テーマは特にありませんが「古平の原風景」ともいえる、多くの方にとってはまだ記憶にある、懐かしい風物を取り上げてみました。

写真のいいところは、誰でも見たらすぐ、「何があるかわかる」ということです。年代や世代をこえて共通にもものを見ると共に、一枚の写真にも、それぞれにまた違った感慨を持たれたことでしょう。

ご覧になられた方から一番多くの関心を寄せられたのは、古平尋常高等小学校開校六十周年記念アルバムからの「高等科二年生」の記念写真でした。

この記念写真は、珍しく写真と写っている生徒の氏名が対照できるので、氏名を見て、誰であるかすぐに分かることです。

当時、百七十余名を数えた生徒も、現存されている方は二十人と居られないようです。お話しからは、若い頃の海難事故や戦

死などと、不幸な時代の影が感じられます。

▽お亡くなりになった服部昇司さんは、戦後間もない頃から、古平の移り変りを写真に収められてきました。その遺作は写真展を開く程沢山あるのですが、今回はその中から、海岸沿いの街並みを六枚つなぎにした写真を展示しました。つないだ写真は、水平に写すことや仕上げが大変難しいのですが、見事な仕上がりになっております。

折があれば、順次ご紹介したいものです。

▽展示にあわせて、展示作品の外にも写真を加えて『古平の風景』という表題で、十二ページのパンフレットを作りました。

「町外の知り合いにも送りたい」ということで、何部か欲しいという方もあり、こちらは現在品切れです。

▽毎度の宣伝をかねて『せたかむい』九月・十月号も五十部増刷しましたが、十月号が十数部余りました。近く還暦を迎えられた方々のクラス会があると聞

いていますので、ぜひ売り込みたいと考えております。

▽先月始めの好日、上水道係の今井さんが水源付近の除草に行くのに同行し、観音滝と付近の写真撮影をして来ました。

七、八年前までは、観音滝への道路も特に悪路という程ではなかったのですが、クマの出没などで訪れる人の姿もなくなり、今ではすっかりさびれてしまいました。

泥の木川は水量も豊かで周囲の紅葉を水に映し、辺りは谷川の流れだけが響くような静寂さでした。好天でもあり、雲の動きは目にもわかりますが、風は全くそよともなく、まさに別世界の感でした。

大正八年、禅源寺岳轉和尚がこの景勝の地を仏教の聖地として、ここに三十三体の観音像を設置して信仰の地としたことから、ながい間、多くの人達で賑い親しまれて来たという経緯があります。

道路さえ良ければ、十和田湖の奥入瀬渓流に勝るとも劣らない景勝地と思うが……？

陽光が照り、滅法明るい墓所でも、夜になりしんと静まる丑三つ時になれば、多少は悚慄（こきり）に似た怖れが行き来するのだろうか。成る程、この気振（きぶり）があればこそ、幼少時の本州生地における陰鬱な墓地への胆試しが震え上がる程怖かったはずだ。私は納得するように肯定した。

思えば人の世は決して平等ではない。独りで生まれたわけじゃなし、母親の胎内から生まれ、様々な人々と関連する中で怒り、泣き、憂い生きて行く。人々との関わりなしに人は生きていけない。

そんな中にも運不運があり、善人が常に倖（あま）せだとは限らない。それも生きている時だけの話、死に際に人の世話になったとしても、死んで終えればすべて一巻の終わり。

少しばかり見栄えのする墓碑の下に眠るか、見すばらしい墓の下に眠るか、それだけでしかあるまい。



古平俳句会

川口の蛙に鴈の群解かず	斉藤波留
秋の潮岬の灯台まばたけり	山口悦子
雷神に草木の揺れの静かなる	越野敏雄
雑草に隠れ育む南瓜かな	大和田絵伊
鬼灯の酔ひたる如の色となり	福井幸平
朝顔の絵具にはなき彩に咲き	高橋重子
清らかな川の流れにあき映し	仲谷比呂古
雨雲の秋を閉して動かざる	室谷弘子
すじ雲の秋風に乗り層雲峡	泉清三
紅葉が湖面に影を落しをり	外山俊久
晩学の辞書は重たし夜の長し	渡辺嘉之
畦徑に突き刺す色や彼岸花	堀典子
夕月の光を肩の出船かな	越野清治



古平町岬短歌会

芒穂の白く光れる路ゆくに足許近くこほろぎ鳴けり	池田テル
十いく年日々入りし用具小屋台風に飛ばされ跡形もなし	鈴木時子
贈られし花りんどうは大好きなうすむらさき色机に飾る	竹内コト
車庫の中につばめ巣作り縁起よし家に傷つくと心は揺らぐ	寺内りょう
倒れても起きあがり咲くコスモスに台風あとの心を遣りぬ	東未知
嵐ゆえ停電となりし一晚をローソクともす山小屋のごと	堀典子
暖かき日日長かりしこの秋はいろ鮮やかなり紫式部	田中香苗

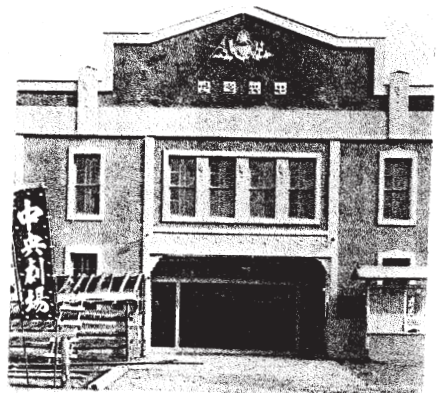
古平町史年表

昭和9年 (1934) ~ 続く

- ▲古平連合青年団が運動会を開き、大勢の町民が集まる
- ▲浜町・沖村の両火葬場が改築される
- ▲ホトトギス同人「高潮」主幹の服部磯石が来町する
- ▲古平中央劇場株式会社が設立され、社長に中村吉蔵が就任する
- ▲古平中央劇場の落成式が行われる
- ▲古平中央劇場が、東京歌舞伎市川海老十郎一座により舞台開きをする
- ▲救農事業として3条通り無名川と側溝の改修工事が行われる
- ▲古平町農会が道産米批判会を開く
- ▲古平愛林組合が防火思想普及のため、古平小学校で映画会を開く
- ▲青年訓練所の教練査閲があり、査閲官の時局講演会が古平小学校で開かれる
- ▲古平中央劇場にレビュー団一行30余人が来演し、自動車で町廻りをして話題になる
- ▲町が経済更生協議会を設置し、更生計画目標を設定する
- ▲大日本国防婦人会古平町分会が発足する
- ▲竹内白雨(琴平神社宮司・本名竹内真之)が『北方詩謡』を創刊する
- ▲稲倉石鉱山で女人夫が機械に挟まれ事故死する
- ▲伝染病隔離病舎に付属して、隔離消毒所が設置される
- ▲海産商のウ斎藤商店が、町内で初めての百貨店を開店する

昭和10年 (1935)

- ▲大日本国防婦人会古平町分会会員が、古盛座と中央劇場で演芸会を開く
- ▲日露戦争30周年記念に、在郷軍人分会の主催でちょうちん行列が行われる
- ▲北海道機船底曳網漁業水産組合が設立され、各根拠地に支部が置かれる
- ▲古平青年訓練所が、新たに青年学校令が施行されたため古平青年学校と改称し、引き続き古平小学校に併置される



↑ 新築なった古平中央劇場



↑ 古平連合青年団運動会
→ 後に大日本婦人会となり、たすきの国防を縫い込んで使った

